

PB-11

日本語の文を先行詞とする「それ」の表層照応～項省略の観点から¹

笠井源(大阪大学大学院博士前期課程)

e-mail: u276946f@ecs.osaka-u.ac.jp

要旨: Hankamer and Sag (1976)以来、言語的な先行詞が必要ない場合、その anaphor は内部構造を持たないという指摘がなされてきた。日本語の文を先行詞とする「それ」という代名詞は、言語的な先行詞を要求しない。しかし、本稿ではその内部からの空演算子や分裂文における焦点要素の抜き出しが可能であるというデータを提示する。それにより、日本語の文を先行詞とする「それ」という要素が深層照応用法だけでなく、表層照応用法も持ちうることを主張する。その分析として、狭義の統語部門で生成された CP が PF で項省略を受け、その代わりに「それ」という要素が挿入されるという PF 置換分析を提案する。また、「それ」の表層照応用法が黒田(1999)が坪本現象と呼んだ主部内在型関係節のデータにより確証される。そして、PF 置換分析がそのデータの分析にも応用される。また、坪本タイプの内在節が項省略にかかる制約が NP と CP とで異なる可能性を示唆することも指摘する。

1. 導入

人間言語の照応には、表層照応(surface anaphora)と深層照応(deep anaphora)の二種類があると Hankamer and Sag (1976)以来指摘されている。表層照応とは、VP 削除のような言語的な先行詞を要求し、その内部構造が統語部門に存在するタイプの照応である。一方、深層照応とは、do it anaphora のような言語的な先行詞を要求せず、その内部構造が統語部門に存在しないタイプの照応である。(1)では先行詞となる VP が言語としてではなく、文脈によって与えられている。その状況で、hack off his hand という VP を省略することは(1a)において表されているように不可能であるが、do it という表現ではその VP を指示できる。

(1) a. Context: [Sag produces a cleaver and prepares to hack off his left hand]

Hankamer: #Don't be alarmed, ladies and gentlemen, we've rehearsed this act several times, and he never actually does [_{VP} Δ].

b. [Same context]

Hankamer: ... He never actually does it.

(Hankamer and Sag 1976, p. 392)

また、内部からの抜き出しの可否に関しても差がある。read which book という削除された VP から which book が抜き出されている(2a)が正文なのに対し、do it の内部から which を抜き出した(2b)は非文である。

(2) a. I know which book₁ Mary read t₁, and which book Bill didn't [_{VP} Δ].

b. *I know which book₁ Mary read t₁, and which book Bill didn't do it.

(Fiengo and May 1994, p. 247)

これは以下の(3)の空演算子(Op)の抜き出しでも同様である。

(3) a. Abby can play more instruments than Op her father can Δ.

(Winkler 2005, p.115)

¹本稿の作成にあたり、越智正男氏(大阪大学)、山田彬堯氏(大阪大学)をはじめとする諸氏から有益なコメントを多数いただいた。この場を借りて感謝を申し上げる。

b. *I have read more books than Op Joe has done it.

(Abels 2012, p. 30)

VP 削除を受けた要素は統語部門においてその内部構造が存在するため、その内部から which book や空演算子の抜き出しが可能である。一方、do it anaphora においては、狭義の統語部門における内部構造が存在しないため、その内部からの抜き出しは不可能である。

日本語の代名詞「それ」は(4)のように、文(CP)を指示する際、言語的な先行詞が必要ない。よって、これは deep anaphor と分析されるべきである。

(4) Context: 妹が火が付いたコンロに手を伸ばそうとしている。

兄: それ(=火が付いたコンロに手を伸ばすのを)はやめとけ!

しかし、文を先行詞とする「それ」の内部から抜き出しが可能であることを二節で観察する。よって、日本語の「それ」は統語的な内部構造を持つ表層照応(Surface anaphora)用法が存在することを主張する。三節では、項省略された CP と「それ」という音形が PF で入れ替わるという PF 置換という操作を提案し、代案に比べて優れていることを見る。四節では、PF 置換という操作が黒田(1999)が坪本現象と呼んだ主部内在型関係節の分析にも拡張できることや、CP の項省略が NP の項省略にかかる制約とは違う制約を持つ可能性を指摘する。五節は結語である。

2. 観察

(5a)は後置詞句難易度文(Takezawa 1987)、(5b)は分裂文の例である。

(5) a. その台から₁が(ジョンにとって)[Op₁[t₁ 飛び込み]]やすい。

(Takezawa 1987, p. 215)

b. 直哉が t₁ 批判したのはこの論文を₁だ。

(6) a. [FocusP この論文を [FinP 直哉が t₁ 批判したの]だ]。

b. [TopP [FinP 直哉が t₁ 批判したの]₂ は [FocusP この論文を t₂ だ]]。

Takezawa 1987 に従い、後置詞句難易度文は埋め込み CP の指定部に空演算子(Op)の移動が起こると仮定する。また、分裂文は Hiraiwa and Ishihara (2012)に従い、焦点要素が FocusP の指定部に移動していると仮定する。(5a)では動詞の補部の位置に生成された空演算子が埋め込み CP の指定部に移動している。(5b)は、動詞の補部の位置に基底生成された「この論文」という焦点要素が、FocusP の指定部に移動した(=6a)のち、取り残された「直哉が批判したの」という FinP が TopicP の指定部に残余移動する(=6b)ことにより派生される。

CP を先行詞とする「それ」の内部からの空演算子の移動は、(7)のような後置詞難易度文で可能である。

(7) a. 自分の弟から₁がジョンにとって[CP Op₁ [お金を t₁ たくさん借りていると認め]やすいが、

b. 自分の親から₂が[CP Op₂ [お金を t₂ たくさん借りていると認め]にくい。

c. 自分の親からが[CP Op₂ それを認め]にくい。

(7a)を先行文とする(7c)では、「お金を t₁ たくさん借りている」という CP を先行詞とする「それ」の内部から空演算子が抜き出されている。しかし、(7c)は正文である。よって、CP を先行詞とする「それ」は統語部門での内部構造を持たなければならない。

(8)のような分裂文においても、CPを先行詞とする「それ」の内部から焦点要素の抜き出しが可能である。

(8)^{2,3} a. ジョンが年内にNLLTに t_1 投稿しろと命じたのは統語論の論文を三本₁だ。

b. 花子が年内にNLLTに投稿しろと命じたのは意味論の論文を四本だ。

c. 花子がそれを命じたのは意味論の論文を四本だ。

(8a)を先行文とする(8c)では、「年内に t_1 NLLTに提出しろ」というCPを先行詞とする「それ」の内部から、焦点要素である「意味論の論文を四本」が抜き出されている。(8c)は正文であるため、CPを先行詞とする「それ」が内部構造を持つ。よって、「それ」の表層照応用法の存在が(7)の例に加えて確証された。

3. 提案

Sakamoto (2020)の提案したPF置換という操作が表層照応用法の「それ」の分析に応用できると主張する。

Sakamoto (2020)は(9a)における「花子が会った男を叱責す」という要素を先行詞とする「そうす」という要素は、狭義の統語部門(NS)では「花子が会った男を叱責す」という先行詞と同一の内部構造を持っている(=9b))と主張した。そして、そのVPがPFにて、削除され「そうす」という要素と入れ替わる(=9c))という操作(PF置換)を提案した。

(9) a. 太郎が花子が会った男を叱責したら、次郎もそうした。

(Sakamoto 2020)

b. NS: 太郎が花子が会った男を叱責したら、次郎も[花子が会った男を叱責し]た。

c. PF: 太郎が花子が会った男を叱責したら、次郎も{そうし}た。

このPF置換をCPを先行詞とする「それ」の分析に応用するため、(10)のように定式化する。

(10) PF置換: PFでCPの音形が項省略によって削除され、「それ」という音形が代わりに挿入される(CPが「それ」と音声的に入れ替わる)(=11a))。

(11)⁴ a. NS: [CP···], PF: [CP~~···~~]→{それ} b. NS: [NP [CP···]それ], PF: [NP [CP~~···~~]それ]

(12)を例に考える。(12c)において、狭義の統語部門では「お金をたくさん借りている」というCPが存在している。それが音声部門(PF)に送られると、そのCPが項省略により音声的に削除される。その代わりに、「それ」という音形が挿入される(=12d))ことで(12b)が派生される。

(12) a. 自分の弟から₁がジョンにとって[Op₁ t_1 お金をたくさん借りていると]認め]にくい。

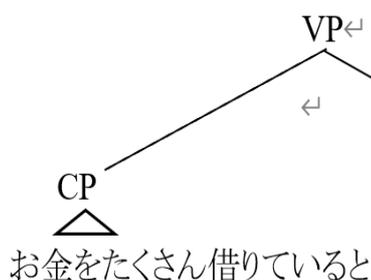
b. 自分の親からもそれを認めにくい。

² この例は平山裕人氏(関西外国語大学)の助言に多くを負っている。この場を借りて厚くお礼申し上げる。

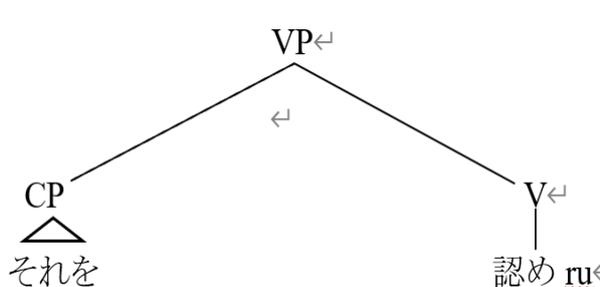
³ 越智正男氏(大阪大学)により、ここでの「それ」はCPではなく、「投稿」という(動)名詞を置き換えている可能性があるのではないかという御指摘をいただいた。それは今後の課題としたいが、この文において「投稿する」を「出す」という漢語動詞を含まない形に変えても、容認性が変わるようには少なくとも筆者には思われない。よって、ここで「それ」が「投稿」を置き換えていてもここでの議論にはあまり関係がないように思われる。

⁴ ({}:PFで挿入された要素、取り消し線:PF削除)

c. NS



d. PF



この分析では、狭義の統語部門で「それ」の内部構造が存在するため、その内部からの抜き出しが可能であること((7), (8))が説明できる⁵。

しかし、「それ」が CP を補部にとり、その CP が項省略を受ける(cf. Sakamoto 2016a) (= (11b))という可能性もある。この場合も、「それ」の内部構造が統語部門で存在している。しかし、この分析には二つの問題点が存在する。まず、(13)が示すように CP を先行詞とする「それ」という要素が CP を補部にとらない。

(13) a. *自分の弟から₁が[_{CP}ジョンにとってお金をたくさん借りていると]それを認めにくい。

b. * ジョンが年内に NLLT に _{t₁} 提出しろとそれを命じたのは統語論の論文を三本₁だ。

(13a,b)のように「ジョンにとってお金をたくさん借りていると」、「年内に NLLT に提出しろ」という CP は「それ」の補部に生起できない。

次に、[NP [CP・・・]それ]という構造は通常、複合名詞句制約の違反であり、その内部からの抜き出しが不可能なはずであることが挙げられる。これは、(7), (8)の抜き出しの事実と矛盾する。

一方、PF 置換であれば、上記のような問題は生じない。「それ」は PF で挿入される要素であるため、「それ」が CP を補部を取る必要はない。したがって、複合名詞の島を形成することもないからである。よって、PF 置換の方が代案よりも優れていると言える。

4. 帰結

4.1 坪本現象

(14a)は日本語の内在節、(14b)は黒田(1999)が坪本現象と呼んだ内在節の例である。

(14) a. 警官が[_{CP}泥棒が銀行から出てきたの]を捕まえた。(主部内在型関係節)

b. 警官が[_{PP}暴漢が襲い掛かってきたのを]逆にそれを組み伏せてしまった。(坪本現象)

(黒田 1999, p. 61)

⁵ ここで越智正男氏(大阪大学)から、「それ」が項省略を含む場合、CP を「それ」で置き換えた場合にも sloppy 読みが取れるはずであるが、それは不可能ではないかという御指摘をいただいた。(i)において、「それ」の先行詞内部にある「自分の提案」が「花子の提案」である解釈(sloppy 読み)が不可能ではないかという指摘である。

(i) ジョンは自分の提案が採用されると信じているが、花子はそれを信じていない。

しかし、筆者を含めこの文における sloppy 読みを許す話者もあり、少なくともそういった話者の存在は本稿での PF 置換という分析を支持することになるだろう。また、(ii)のようなコントロール節 CP を「それ」が先行詞としている文では、sloppy 読み(「メアリーの部屋」という解釈)を出しやすくなるようである。

(ii) 年末に太郎は自分の部屋を大掃除しようと固く決心したが、メアリーはそれを決心しなかった。

(14a)では「捕まえられた」のは「泥棒」であり、(14b)では「組み伏せられた」のは「暴漢」である。しかし、「それ」は通常人を指示しない。そのため、黒田 (1999, p. 61)は「それ」の先行詞である CP が、(LF で)「再建」されるという操作を代名詞の「それ」に対して仮定した。(15)を考える。

(15) a. NS: 警官が[pp 暴漢が襲い掛かってきたのを]逆にそれを組み伏せてしまった。

b. LF: 警官が[pp [cp 暴漢が襲い掛かってきたのを]逆に<[cp 暴漢が襲い掛かってきたの]>を組み伏せてしまった。

(15)において、狭義の統語部門内で生成された「それ」という要素が LF で、その先行詞である CP「暴漢が襲い掛かってきたの」という CP に、「再建」という操作により取って代わられる。黒田は意味役割が長距離で付与できると仮定しているため、「再建」された CP の内部要素である「暴漢」が「組み伏せる」の対象として LF で意味役割を付与される。これにより、「それ」が実質的に「暴漢」を指示しているように見える。よって、このデータは抜き出しの事実以外にも、CP を先行詞とする「それ」が統語部門で内部構造を持つことを支持する。

しかし、黒田の「それ」の分析としての「再建」という操作には問題点がある。それは、LF で「それ」の内部要素を導入してしまうと、分裂文における音形のある要素の抜き出し(8)が可能であることが説明できない⁶。LF で「それ」の内部要素を導入する場合、分裂文の焦点要素が狭義の統語部門で移動する際に、それがまだ導入されていない。一方、PF 置換分析では、狭義の統語部門で CP を先行詞とする「それ」の内部構造が存在するため、分裂文において焦点要素がその内部からの抜き出しを受けることを説明できる。また、PF 置換分析では、狭義の統語部門に「それ」の内部構造を想定する。よって、坪本タイプの内在節で「再建」を仮定した場合と同様に、関係主要部((15b)の「暴漢」)が意味役割を受け取れる。よって、黒田の「再建」という操作よりも、本稿で提案した PF 置換分析の方が経験的に優れている。

4.2 項省略の制約

項省略には制約があるというのが Abe (2009)で主張されている。(16)がその制約である。

(16)⁷Anti C-Command Requirement:先行詞が省略箇所を C 統御しない場合に NP の項省略が可能。

(Abe 2009)

(17)では、(17a)の埋め込み節の空目的語(Δ_1)は「先生の娘」という sloppy 読みを許さず、「自分の娘」という DP を先行詞として項省略されていない。一方、(17b)では、主節の音声的に空虚な要素(Δ_1)は「自分の学生」という DP を先行詞とし、「山田先生の学生」という sloppy 読みを許す。即ち、項省略が関与している。

(17) a. ジョンは自分の娘に ₁[先生が Δ_1 会いたがっている]と言った。 ✓ strict; × sloppy

b. [自分の学生を ₁叱った先生]が山田先生に Δ_1 叱らないように忠告した。 ✓ strict; ✓ sloppy

(Abe 2009, p. 151, 152)

⁶ (7)で議論した空演算子の抜き出しも LF 再建分析の問題になるかもしれない。空演算子の移動は狭義の統語論内部で起こるとされていると考えられているため、LF で「それ」の内部構造を再建した場合、空演算子が移動できないからである。しかし、Sakamoto (2017)のように空演算子の移動を LF 移動であると考えた場合、LF 再建分析は空演算子の移動とは整合性があるということになる。

⁷ 以下の議論は Sakamoto (2016b)の phase に基づく制約を項省略の制約として用いた場合にも同様である。経験的にも理論的にも Sakamoto の制約が Abe の制約よりも優れていると思うが、ここでは説明の便宜上 Abe (2009)に基づき議論をする。

これは、(16)により説明される。(17a)では、 Δ_1 の先行詞である「自分の娘」という要素が、 Δ_1 をC統御している。(17b)では、 Δ_1 の先行詞である「自分の学生」という要素は Δ_1 をC統御していない。そのため、(17a)は(16)に違反する。よって、(17a)の Δ_1 は項省略を受けることができず、(17b)では項省略が可能である。

(16)がCPの項省略に応用できるかは議論されていないと思われるが、坪本タイプの主部内在型関係節が項省略(とPFでの挿入)により派生される場合、(18)はNPとCPに対する制約が異なる可能性を示唆する。

(18) a. 警官が[PP[CP 暴漢が襲い掛かってきたの]を⁸]逆に[それを⁹]組み伏せてしまった。

b. *警官が[それを][PP[CP 暴漢が襲い掛かってきたの]を]逆に組み伏せてしまった。

c. *[それを]警官が[PP[CP 暴漢が襲い掛かってきたの]を]逆に組み伏せてしまった。

(18b,c)は坪本タイプの内在節の「それ」という要素をそれぞれ、PPよりも構造的に高い位置と文頭に「かき混ぜ」により移動させたものであるが、それらは容認度が低い。(18a)では、項省略を受けた要素である「それ」はその先行詞である「暴漢が襲い掛かってきたの」というCPにC統御されないため、(16)を遵守し、正文である。しかし、(18b, c)においても、そのC統御関係は同一であるため、なぜ(18b, c)が非文であるのかは(16)の条件では説明できない。ここで、NPとCPでは項省略の制約が異なると考え、CPの項省略にかかる条件として(19)の条件を提案する(NPにかかる制約としては依然として(16)を想定する)。

(19)C-Command 条件:項省略を受けるCPは先行詞をC統御しないときのみ項省略が可能。

(18b,c)では、(PF置換の下位操作として)項省略を受けた「それ」が先行詞CPをC統御するが、(18a)ではC統御しない。よって、(19)の条件は正しく(18)のデータを説明する。

また、この制約は、(20)のような先行詞内包型節補文省略(ACE)のデータを正しく予測する。

(20) a. ジョン₁は[advP メアリー₂が[CP 彼が自分を₁₂批判したと]言う前に]自分₁を批判した。

b. [CP₃ ジョン₁は[CP₂[advP メアリー₂が[CP Δ] 言う前に][CP₁ t₁ 自分₁を批判した]]]。

c. Max₁ saw his₁ mother, and Oscar₂ said that Harry₃ did [VP see his_{2/3}-mother], too.

(Takita 2018 に基づく)

(20b)の Δ は「t₁ 自分₁を批判した」というCP₁を先行詞として、項省略を受けている。Takita(2018)は、(20b)の Δ の解釈が「ジョンがメアリーを批判した」という解釈はなく、「ジョンがジョン自身を批判した」ことにしかならないことから、このCPが項省略を受けていると主張した。省略を受けた要素内の変項の解釈は、先行詞の変項がどのように束縛されたかに依存することがFiengo and May (1994)などにおいて報告されている。先行文にて、変項が同一節内で局所的に束縛された場合、省略要素に含まれている変項も同一節内で解釈される。例えば、(20c)で先行文のMaxがhisという変項を局所的に束縛している状態では、後続文でOscarがhisを長距離束縛できず、Harryが局所的に束縛するしかない。(20b)の音形のないCPが項省略で派生されているとする。(20b)の音形のないCP(Δ)の解釈が「ジョンがメアリーを批判した」という解釈はなく、「ジョンがジョン自身を批判した」ことにしかならないことは、(20c)にて働いているのと同様の省略の変項に対する解釈の制限により説明される。即ち、先行詞であるCP₁内で「自分」という変項が局所的にt₁に束縛されているため、音形のないCPにおいてadvP内の主語である「メアリー」が「自分」を長距離束縛できず、「ジョン」が「自

⁸ この「を」は黒田(1999)に倣い、後置詞であると仮定する。

⁹ この「を」はCPに付加する小辞(particle)であると仮定し、K(ase)Pの主要部であるとは仮定しない。

分」を局所的に束縛するしかないということである。

(20b)は(16)を項省略に働く制約だとすると、「 t_1 自分₁」を批判した」という先行詞 CP1 が項省略を受けた CP を C 統御するため、非文と予測される。一方、項省略を受けた CP が CP1 を C 統御しないため、(19)の C-Command 条件では正文と正しく予測される。よって、(19)の条件は Abe (2009)の(16)の条件では排除されてしまう(20)のデータを正しく予測するという点で、(18)のデータを説明するだけの規定ではないといえる。

5. 結語

文を先行詞とする「それ」という要素の内部から、抜き出しができることを通じて、「それ」が狭義の統語部門にて内部構造を持つこと、即ち「それ」の表層照応用法の存在を示した。その分析としては PF 置換分析を提案した。坪本タイプの主要部内在型関係節の分析により、「それ」の内部構造の存在が抜き出し以外の事実によっても確認された。また、PF 置換がこの種の内在節の分析にも応用できた。坪本タイプの内在節のデータが NP と CP とでは項省略にかかる制約が異なる可能性を示唆し、その分析として C-Command 条件を提出した。

参考文献

- Abe, J. (2009). Identification of null arguments in Japanese. In *The dynamics of the language faculty: Perspectives from linguistics and cognitive neuroscience*, ed. Hoshi, H., 135–162. Kuroshio Publishers.
- Abels, C. (2012). *Phases: An Essay on Cyclicity in Syntax*. de Gruyter.
- Fiengo, R and R, May. (1994). *Indices and Identity*. MIT Press.
- Hankamer, J and I, Sag. (1976). Deep and Surface Anaphora. *Linguistic Inquiry*, 7, 391–428.
- Hiraiwa, K and S, Ishihara. (2012). Syntactic metamorphosis: clefts, sluicing, and in-situ focus in Japanese. *Syntax*, 15 (2), 142–80.
- 黒田 成幸. (1999). 「主部内在関係節」『ことばの核と周縁』27-103,くろしお出版.
- Sakamoto, Y. (2016a). Clausal complement “replacement”. In *Proceedings of Formal Approaches to Japanese Linguistics 8 (FAJL8)*, MIT Working Papers in Linguistics 79, edited by Ayaka Sugawara, Shintaro Hayashi, and Satoshi Ito, 109–120.
- Sakamoto, Y. (2016b). Phases and argument ellipsis in Japanese. *Journal of East Asian Linguistics*, 25, 243–274.
- Sakamoto, Y. (2017). *Escape from silent syntax*. Doctoral dissertation. University of Connecticut.
- Sakamoto, Y. (2020). “Elliptic do so in Japanese.” In *Proceedings of CLS55*, edited by Ömer Eren, Asimina Giannoula, Sam pGray, Chi-Dat Lam, and Aurora Martinez Del Rio, 55:365–380. Chicago Linguistic Society.
- Takezawa, K. (1987). *A configurational approach to case-marking in Japanese*. Doctoral dissertation, University of Washington.
- Takita, K. (2018). Antecedent-contained clausal argument ellipsis. *Journal of East Asian Linguistics*, 27, 1–32.
- Winkler, S. (2005). *Ellipsis and Focus in Generative Grammar*. Mouton de Gruyter.